

自然環境

調査

仕事という

前回は、環境アセスメントにおける自然環境調査の推移と、我々調査者が現地調査からデータをまとめて成果に至るまでの流れを簡単に紹介した。今回は、いくつかの調査事例から都市域での生きものとの共生について考える。

カラスのねぐら



都市近郊の大規模公園予定地において、鳥類調査を行なった際、ハシブトガラスが多く観察された。予定地の隣接地には住宅団地があり、団地から出るゴミがカラスを集めていると思われる。さらに、予定地の一部にはシラカシの常緑樹林があり、これが格好の隠れ家になっているようである。東京都区内のカラスのねぐらとしては、白金の自然教育園と明治神宮の森が有名だが、ともに樹高の高い常緑樹の森である。最も大きいねぐらを作る冬には、葉の落ちない常緑樹林が身を隠すのに都合が良い。以前、調査を行なったことのある川崎市の緑ヶ丘霊園では千羽近い大きなねぐらを確認したが、これもやはり常緑樹のシラカシが多い森であった。



さて、前述の公園予定地の隣接地には動物園が計画されている。多摩動物公園の例では動物園で餌をとるカラスが、隣接する樹林地で約千羽のねぐらを形成している。常緑樹林のあるこの公園予定地でも、将来、隣接する動物園で餌をとるカラスがねぐらを作るこ

とが考えられる。カラスのねぐらは、他の鳥類の生息を圧迫する。白金の自然教育園ではカラスが集まって来ると同時に、ヒヨドリなどの他の鳥が自然教育園の森から外に飛び出して行くのが観察されている。また、鳥類だけでなく、森の生態系全体に悪影響を与えることも考えられる。特に、既存の自然を活用する予定であるこの公園では、カラスのねぐらの存在が、公園利用に影響を与える問題ともなりかねない。

ねぐらをつくりにくい森



このような場合、羽のあるカラスに集まるなどといっても難しいが、少しでも集まりにくい環境づくりをすることによって、公園予定地の森の生態系を健全に保っていく必要がある。そのための一つの方策として、常緑樹林の林相転換を行ない、カラスの集まりにくい森づくりを行なうことが考えられる。具体的な手法としては、段階的に除伐したり、パッチ状の皆伐を行なうことにより、周囲からの自然侵入や埋土種子の発芽を促し、徐々に広葉樹の割合を増やし、林相の転換を図っていく。



参考写真：池田一彦 著 カラスはどいして暮らしているか 中央書房

(『Coppice』NO.5 より転載)

もし、長期間にわたってこのような林相転換を行ないながら、カラスの生息数やねぐら利用の有無およびその状況をモニタリングできれば、カラスの集まりにくい森づくりの参考になるデータがとれるのではないだろうか。また、基礎データとして、カラスのねぐらが森林生態系に与える影響を具体的に明らかにしていくことも、都市自然を考えるうえで興味深いテーマである。

最近、中部地方のある町で数千羽のムクドリがケヤキの街路樹にねぐらを作り、付近の住民から苦情が絶えないため、管轄の土木事務所からその対策についてのコンサルティングを依頼さ

れた。ムクドリが集まった原因は定かではないが、ヒアリングによると、かつて近くを流れる川の河川敷の竹林にねぐらがあったが、環境整備のために竹林を伐採した後からムクドリが街路樹に集まるようになったという。カラスのねぐらに限らず、このような問題は全国各地で起こっているようだ。

都市域での環境共生

ムクドリのねぐらを除去して生活環境を守ることは、もちろん大事なことだ。しかし、一方で生きものとの共生をうたいながら、特定の生物だけ増え

て生活に不便が生じると、今度はそれを排除しようという場当たりの環境管理を行なわざるを得ない現実がある。

都市域における生きものとの共生は、我々の生活環境を快適にするためにも、また、健全な次世代を育成していくという環境教育的な側面からも重要な課題であり、その重要性は社会的なコンセンサスを得つつある。しかし、ただ単に生きものが身近にいればいい、というだけでなく、バランスのよい健全な都市生態系を維持していくことが重要であると感じる。特定の動物だけが増えるような不健全な生態系では、やはり本当の環境共生とは言えないだろう。

(代表取締役社長・高塚敏)